史料ネット NEWS LETTER

第６号　1996年11月12日（火）

発行 歴史資料ネットワーク（神大文学部内）
TEL078-881-1212（内線4070），FAX803-0486

目　次

日本史研究会大会特設部会のお知らせ…… 1
各種プロジェクトの状況…… 2
地域住民とともに…… 4
淡路島調査報告…… 5
速報!!第５回・第６回市民講座…… 6
新聞記事より…… 7

さらに広がりを見せる史料ネットの活動

継続的活動へと改組したネットの活動は、引き続き大きな広がりを見せています。被災地復興と歴史・文化の保全、あるいは歴史学と現代社会との関わりをめぐる様々な課題に、住民とともに取り組む各プロジェクトを中心に、ネットの活動を報告します。

ありがとうございました

ところで、第５号発行の６月末以降、全国の皆さんから約160万円の募金があり、また400冊以上の記録集購入をいただきました。これにより、当面目標としていた財源確保は一応達成したとは言え、今回紹介しているような活動の広がりからすれば、長期的に見た財政状況は必ずしも十分なものではありません。引き続き、ご支援・ご協力をお願いいたします。

日本史研究会大会特設部会にご参加ください。

前号でもお知らせしたように、日本史研究会大会で、特設部会『阪神淡路大震災と歴史学ー被災史料保全活動からみえたこと』が開催され、史料保全活動の中間的総括を行なうことになりました。日本史研究会主催ですが、史料ネットに関わる各学会との共同の企画です。当日は、史料ネットの活動の概括、そこから明らかになった現代都市社会における史料保存と歴史学の課題、さらに新たな課題へいかに具体的に取り組んでいくかを、各報告者から問題提起していただいた上で、議論をすすめて行きたいと考えております。ぜひご参加ください。

■日　時　　１１月２３日（土）午後２時１０分より、５時３０分まで
■場　所　　立命館大学衣笠学舎（京都市北区等持院北町）明学館３階９４号教室
■報告者　　藤田明良「史料ネット活動概要」
　　奥村　弘「史料保全活動から見た現代都市社会の歴史意識と歴史学の課題」
　　大国正美「生活者の歴史意識と史料保存」

（『日本史研究』410号（1996.10）に藤田氏の詳しい論文と他の報告者の報告要旨を掲載しています。ご参照ください。大会についての問い合わせは日本史研究会事務所（TEL 075-256-9211）まで）

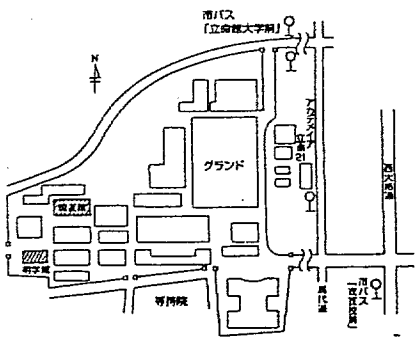
利用交通機関のご案内

JR・近鉄　京都駅前から市バス㊿特㊿にて
「立命館大学前（終点）」下車（約45分）
京都駅から市バス㊿にて
「立命館大学前」アカデメイア立命21下車（約50分）
市バス㊿にて「衣笠校前」下車（約40分）西へ徒歩5分

JR　二条駅から市バス⑲㊿にて
「立命館大学前（終点）」下車（約20分）

京阪電鉄　三条駅から市バス⑲㊿㊿にて
「立命館大学前」下車（約40分）

阪急電鉄　西院駅から市バス特㊿特㊿にて（但し休日運休）
「立命館大学前（終点）」下車（約25分）
市バス㊿にて「衣笠校前」下車（約20分）西へ徒歩5分
大宮駅から市バス㊿にて
「立命館大学前（終点）」下車（約25分）



史料ネット活動支援募金　（郵便振替）
名義　阪神大震災対策歴史学会連絡会　　口座番号　０１０９０－７－２３００９

各種プロジェクトの状況

■埋蔵文化財問題

緊急報告会の開催　去る９月６日に「被災地の埋蔵文化財についての緊急報告会」をもちました。関係団体・学会の代表はじめ、行政・在野の研究者ら11名の参会者がありました。

当日は、まず兵庫県教委埋文調査事務所副所長の大村敬通氏の報告がありました。報告では、被災地では通常の１０倍規模の発掘が行なわれているにもかかわらず、調査員が絶対的に不足し、調査期間も短縮され、また、遺跡の現地見学会もほとんど開かれず、報告書の作成もままならない等、調査・公開・記録・保存の全ての局面で、埋蔵文化財に対応する体制に大きな制約・限界が存在することが訴えられました。また、そのような事態の背景には、文化財調査・保存への配慮よりも「復興開発」の論理が優先されるという構図があり、たとえば、弥生時代の住居跡としては第一級の遺跡であり、通常であれば保存されて然るべきはずの尼崎市の「武庫荘遺跡」が、「復興」名目のマンション建設の方が優先され地中に埋め戻されるという事例も紹介されました。

その後、報告をうけて意見の交換が行なわれ、活発かつ忌憚ないやりとりが交わされました。そこでの議論は、行政・在野の研究者・地元住民・他地域の市民、さらにはマスコミをも含めた相互の間に、新しいつながりのあり方＝ネットワークを形成し、協力体制を組んでゆく事が、多大な制約をもつ被災地の埋蔵文化財問題に対応してゆくにあたっては必要であり、ひいてはそれが、通常の埋文問題（保存等）が抱える難関を打開してゆく体制をつくってゆくきっかけになるという点に収まっていきました。具体的には、月に一度程度のペースで、定例見学会「被災地の遺跡を考える見学会」を行なって、そこを対応の拠点としてゆこうということになりました。

第１回見学会開催　その第１回は、11月６日に行なわれました。対象は、「長田神社境内遺跡」（中世末～近世初の長田神社神官住居跡）で、参加者12名を得ました。現場はもと民家でしたが、震災によって倒壊し、その跡地に１０階建のマンションが建設されるのにともなう調査発掘です。現場では、大阪等から派遣された調査員の方々が発掘に携わっておられましたが、その横では「調査済み」とされた部分から、すでに建設工事が漸次行なわれていました。また、地元住民の方々の側からは、景観破壊・日照悪化等の点から、マンション建設反対の運動が起こっているようで、それとの関係で発掘作業が中断されることもままあるとのことでした。地元の反対運動の矢面に、発掘調査員ならびに調査発掘事業が立たされているという構図です。

ところが、家屋倒壊跡の地所を結果的にﾏﾝｼｮﾝ用地として売却したのもまた地元住民であり、そ

被災地の遺跡保存問題を取り上げる新聞報道、1996年７月23日付毎日新聞より

復興優先 遺構保存せず
市民は文化財指定要望

兵庫県芦屋市のマンション建設予定地で、同市初の弥生時代前期（約2200年前）の定住遺構が見つかった。阪神間中部での同時期の空白を埋める発見で、周辺住民は22日までに、市の文化財に指定して保存するよう北村春江市長に要望書を提出した。しかし、阪神大震災で大きな被害を受け市街地復興を急ぐ市は、遺構は残さない方針で、現地説明会を開かず、発掘調査が全部終わらないうちに埋め戻しを始めている。震災から1年半の被災地では復興事業の本格化で発掘調査も急増。復興と遺跡保存の調和が新たな問題として浮上している。

予定地は同市業平町、JR芦屋駅南西の住宅街。震災で倒壊した個人病院跡の998平方㍍に業者が5階建て18戸のマンションを建設する。市は既に6月に建築確認を出した。

発掘調査は6月下旬から始まり、約半分の発掘を終えた。弥生人の定住を示す水路跡や土壙(穴)のほか、タコつぼ2点、土製の投網用おもり4点などが見つかった。市文化財課によると、当時は予定地のすぐ近くまで海で、芦屋の弥生人が漁をしていたことも裏付けられたという。

周辺住民は、市が建築確認を見直し、予定地を買い上げ市の文化財として保存するよう要望。しかし、市は「画期的な発見」としながらも遺構は保存せず、計画通りマンション建設を認める方針。今月末までに発掘調査を終え、予定地をすべて埋め戻して記録だけを残す予定で、「現地説明会など公表の場を設けることはしない」という。

弥生前期の定住跡が確認された兵庫県芦屋市の発掘現場

芦屋市

の選択は、おそらくやむにやまれぬものであったろうことも同時にかつ容易に想像がつくところです。今回の見学会は、遺跡自体の興味深さはもちろん、被災地の埋蔵文化財をめぐるこのような複雑で困難な状況を具体的に見知ることができたという点でも、有益であったように思えます。（第２回見学会の予定については、本ニュース８頁をご覧下さい）

■震災資料収集と記録編さん

第２回研究会の開催　震災資料と記録について、２月23日に(財)21世紀ひょうご創造協会と史料ネットの共催による研究会を開催したことは、すでにニュースレター第５号でも紹介しました。その後の動きについて情報交換し、より幅広いネットワークによる取り組みを開始すべく、第２回の「震災記録の保存と編さんに関する研究会」を10月13日（日）に神戸大学文学部で開催しました。主催は前回と同じく21世紀ひょうご創造協会と史料ネット、全史料協近畿部会と(財）あまがさき未来協会の後援を得ました。参加者は25名でした。

研究会は芝村篤樹氏・奥村弘氏を司会に、まず21世紀ひょうご創造協会とあまがさき未来協会から、それぞれ兵庫県と尼崎市における震災資料収集・記録編さんの取り組み状況が報告されました。県は復興計画にあわせて10年計画、尼崎市は２年後の1998年に刊行の予定で事業に取り組んでいます。両者とも共通して、単なる行政の記録にとどめず、民間資料の収集保存も視野に入れた編さん事業を目指しているとのことでした。

続いて、岩崎信彦氏(神戸大学文学部、社会学)、小森星児氏（大阪商業大学商経学部)、小田康徳氏(大阪電気通信大学、歴史学)からそれぞれ報告があり、ディスカッションを行ないました。そのなかで、復興・まちづくりに向けて市民のさまざまな動きがあり、ネットワーク化されつつあること、震災研究も様々な学際的分野で取り組まれつつあるが、分野ごとの縦割りの弊害、資料情報の収集と発信がむずかしいこと、一次的な情報を分析して今後に活用できるものにしていく人手が圧倒的に足りないこと、図書館・史料保存機関や大学などで資料収集も行なわれているが、全体としてこれらをケアすべき行政側の体制がまったく不十分であること、などがあきらかにされました。こういった状況を少しでも改善すべく、21世紀ひょうご創造協会を中心に、各分野の学会とも連携した震災研究・資料情報のネットワークを模索していくことも提案されました。

取り組みの意義、今後の展望　震災記録をめぐっては、その対象があまりに膨大で、しかもこの問題に対する被災地の自治体の関心は必ずしも高くなく、加えていずれの被災自治体も極度に困難な財政状況にあることなど、状況は決して明るいものではありません。しかしながら、震災の経験をきちんと記録に残し、総括して社会に還元できるかどうかは、今後の日本社会のあり方を左右する、あるいは全世界的な意義さえ持つ重要な課題です。これについて、21世紀ひょうご創造協会の北岡氏は、現代の都市の持つ矛盾の噴出や、本当の意味での市民主体のまちづくりのあり方、外国人と都市のコミュニティの問題など、今回の経験は21世紀の新しい都市文化をつくる基礎となるものと指摘され、困難ななかでも取り組みを進める決意を表明されました。

氏に代表される関係者の努力を無にすることなく、そしてもちろん、復興に向けて努力する市民の営みを永く未来に活かしていくためにも、一層の取り組みが必要とされています。史料ネットとしても、引き続き重点課題として位置付け、学際的なネットワークの構築を目指していく予定です。しかしながら、この課題はあまりに大きく、他にも様々なプロジェクトを抱えている現ネット運営メンバーでは、果たしてその任を果たせるかどうかという状況です。読者の皆さんからの、ぜひとも幅広い主体的参加や、情報提供などの協力をお願いしたいと思います。

■街の石造文化財を守る

被災地では神社の灯籠・瑞垣、街角の道標などが、復興の中で姿を消しています。中には近世の酒造や回船関係の銘文をはじめ、先人に関する貴重な情報をつたえるものも少なくありません。ネットでは文化財や修復科学の専門家と、調査や協議を重ねてきましたが（既報）、記録調査の集い「街の石造物から歴史を探る会」を催し、保存に向けての動きをつくっていくことになりました。まず灘・東灘区の神社などを対象に開催します。多くの方のご参加をお待ちしています。

☆★ 街の石造物から歴史を探る会　12月１日(日)午前10時JR住吉駅南側（階段下）集合（～午後５時）

地域住民とともに

前回の第５号でも紹介したように、復興のなかで高まっている「足元の歴史」への関心を受けて、ネットのボランティアが地域住民とともに地域の歴史の掘り起こす企画が、各地で始まっています。各取り組みのその後の状況、ならびに新たにスタートした取り組みは次のとおりです。

＜宝塚・古文書を読む会＞　宝塚市（郷土資料室）とネットの共催として５月にスタートした「宝塚の古文書を読む会」は、８月から会員７０名による自主運営の形で再スタートしました。月１回のペースで開催され、ネットが救出保全した和田家文書をテキストに、毎回６０人前後の参加者によって続けられています。参加者からは「口米と消費税との関係は？」など、活発な質問が続出し、活気あふれる会となっています。

＜西宮・門戸の歴史資料を守る会＞　地元住民とネットのボランティアなどでつくる「門戸の歴史資料を守る会」は、震災後に発見・救出された史料を公開する「門戸の歴史を知ろう展」（７月６日～21日）を東光寺（門戸厄神）で開催、1,300人以上が来場し、大成功に終わりました。展示会の後「守る会」は東光寺境内に資料館を建設する計画をたて、まず１年間は計画を練ることとし、各地の博物館・資料館の訪問見学から始める予定です。

＜東灘区・森南町歴史勉強会（仮称）＞　昭和初期の区画整理関係史料を含む、神戸市東灘区森北町・藤本家文書の発見を機に、森南町の街づくり協議会から史料ネットに対して、地域の歴史を学ぶ勉強会への協力申し入れがありました。住民本位の街づくりを考えるため、区画整理以前の土地利用の様子や、暮らしの姿などを参考にしたいということで、ネットとしても講師派遣などの面で協力をすることにしています。８月に第１回の打ち合わせ会を行ない、区画整理をめぐる地元と市の交渉の進展状況をにらみながら、12月頃から勉強会をスタートすることになっています。打ち合わせのなかでは、参加した住民から、地元の歴史や史料についての貴重な情報も寄せられています。

＜大阪市西淀川区での取り組み＞　尼崎や西淀川では、公害関係資料の保存・活用や、今後のまちづくりに歴史・文化を活かしていく取り組みが始まっています。西淀川では、このほど「あおぞら財団・公害地域再生センター」が正式に発足し、いよいよ本格的な取り組みが始まりました。

これについて、８月28日には同センター事務所において、関西大学文学部の小山仁示氏もまじえて、史料ネットおよび大阪歴史学会担当者と財団スタッフとの協議を行ないました。当面は、来年３月に開催する大阪歴史学会の見学検討会を西淀川で開催し、今後の継続的な取り組みの第一歩とすることが確認されました（この企画の詳細については、次号で紹介する予定です）。

さらに、阪神・淡路大震災の資料の保存と記録の編さんについても、兵庫県側と比較して大阪府側ではまったくといってよいほど取り組みがなく、何らかの対応が必要ということが話し合われました。あおぞら財団ではこの提起を受けて、西淀川での動きをつくるべく、震災資料の収集保存と震災展の開催に向けて地域のネットワークを活かした取り組みを開始しつつあります。史料ネットでは、今後府や市とも連携しながら、取り組みを進めていく必要があると考えています。

＜「尼崎戦後史聞き取り研究会」スタート＞　尼崎では、市による新市史事業とも連携しながら、戦後史や農業史に関する聞き取りのプロジェクトが進んでいます。そうしたなかで、９月２日仮称「尼崎戦後史聞き取り研究会」が正式に発足、第１回研究会を開催しました。同会では、各種都市問題が集中する、ある意味で戦後日本の都市を象徴する地域である尼崎をフィールドに、当面は労働運動・文化運動や闇市に関する聞き取りなどを重点課題として取り組んでいく予定です。

同研究会の具体的な取り組み状況と成果については、尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』第25巻第３号（1996年３月発行）掲載の、佐賀朝「尼崎ヤミ市フィールドワーク参加記」および、森下徹「初期尼崎母親大会と地域社会」をご参照ください。第２回研究会は、12月４日午後６時から、尼崎市立地域研究史料館で開催の予定です。参加申し込みや問い合わせは、世話人（高岡裕之・佐賀朝・森下徹）または尼崎史料館（TEL 06-482-5246 辻川・尾崎）まで。

淡路島調査報告

去る９月７日から８日にかけて史料ネットのメンバーは淡路島で合宿調査を行ないました。被災地のうち淡路島を調査することは長い間懸案となっていましたが、ようやく実現しました。今回の調査では、今年１月から３月にかけて実施した救出史料保管・整理状況アンケート調査（概要はシンポジウム記録集第２集を参照）に回答いただいた各史料関係機関を訪問して、被災後の状況や各機関の現状などを直接担当の方からお聞きすることを主目的とし、東浦町、北淡町、五色町、洲本市の４市町を周りました。奥村代表幹事、藤田事務局長はじめ８人が参加しました。

最初の訪問地、東浦町では、町史編集事務局の脇田晃さんにお話を伺いました。震災に際しては町史編集中ということもあり、広報でのよびかけや巡回調査を行なうなど積極的な史料受け入れを行ない、大量の民具類が救出されたほか、あるお寺から受け入れたふすまから多数の裏貼り文書（近世～近代）がみつかるなどの成果が上がったとのことでした。

つぎに訪問したのは北淡町歴史民俗資料館です。館長の富永孝さんは、あいにくお留守でしたが、資料館の展示には圧倒されました。救出された文書や民具だけでなく、おびただしい数のたこつぼや貝殻（常設展示）、展示室や開放された所蔵庫に所狭しと並べられた民具類（御輿から子供のおもちゃまで）などなど、町の生活と文化に関わる、ありとあらゆる史資料が展示されていました。震災直後から撮影された多数の写真を含む震災記録展示も眼をひきました。この資料館の仕事をほとんど一人でやっておられる富永さんにお会いできないのを残念がったのですが、翌朝、我々が泊まる民宿に富永さんご本人が訪ねてこられ、直接お話をきくことができました。

特に興味深かったのは、館が行なっている「ふるさと歴史教室」についてのお話で、町民から希望者を募り、毎月１回のペースで現地見学会を行なっているそうです。現在も35人ほどのクラスが３つあり、１人の「生徒」さんは３年半で「卒業」し、卒業後もOBとして１年間参加するというしくみで、地質・自然から歴史、現代の最新施設など、淡路島内約280か所のほか、年２回は島外へも足を伸ばすそうです。３クラスすべての案内役を富永さんお１人で務められるそうです。教室の生徒やOBたちが町内に多数いるため、日常的にも史料に関する情報が富永さんのところに入るようになっていて、震災後もそうした町民のみなさんの協力を得て救出活動が行なわれたそうです。また富永さんは、粗大ゴミの日の“巡回調査”を欠かさずされてきただけでなく、町の写真もずっと撮りつづけてきたそうで、こうした20年間にわたる活動が、震災後にも当たり前のこととして活かされたのです。この資料館と富永さんには多くのことを学ばせていただきました。

次に訪問したのは五色町の「菜の花ホール」（高田屋顕彰館・歴史文化資料館）です。館長の高田弘文さんからお話を伺いました。町出身の高田屋嘉兵衛の顕彰と地域史料の展示を目的としています。歴史資料の受け入れや保管全体を担当する施設ではありませんが、開館時期と震災が重なったこともあり、展示史料には被災史料も含まれ、文書・和本類や民具が所蔵・展示されていました。ユニークな町おこし事業と歴史・文化事業を結びつけた例として興味深いものでした。

最後に訪問したのは洲本市立淡路文化史料館で、館長の武田信一さんにお話を伺いました。震災後、淡路島では地元の淡路地方史研究会が神戸のNGOと協力して被災史料救出を進めましたが、当史料館にもその救出史料が保管されています。救出史料は、民具類は高校生ボランティアの協力なども得ておおむね整理が終了しましたが、文書類はまだ十分整理が進んでいないとのお話でした。各収蔵庫も満杯状態で今後、保管場所など施設面での困難も大きいとのことでした。

武田さんからは、市民運動を通じてつくられた史料館のユニークな歴史や、息の長い活動を続けている淡路古文書学習会の活動などについても興味深いお話を聞かせていただきました。

わずか１泊２日の調査ではありましたが、お忙しいなか快く調査に応じていただいた各機関の皆さんのおかげで、充実した調査になりました。ご協力いただいた皆さんにあらためてお礼を申し上げます。また直接訪問できなかった地域の関係機関の皆さんも含め、淡路島の方々とは、今後もさまざまな面で協力していけたらと考えています。どうぞよろしくお願いします。

速報！！第５回・第６回市民講座

毎回好評を重ねている「震災復興・歴史と文化を考える市民講座」。この間、第５回を伊丹市で、第６回を尼崎市で開催しましたので、概要をご紹介します。第５回講座については、事前の調査不足から内容的に一部不備があり、その点のご指摘をいただきました。今後はそのようなことのないよう、注意して事業に取り組んでいきたいと考えています。今後も、企画内容等についてのご教示など、皆さんのご協力をお願いします。

なお、次回は来年度、神戸での開催を計画しています。

＜第５回＞　参加者約80名

日時・場所　　1996年８月25日（日）午後１時～５時30分　大手前女子短期大学Ａホール

講演者　　藤井直政氏（大手前女子大学教授）川口宏海氏（大手前栄養文化学院助教授）

「発掘から見た伊丹郷帳－近世から近代への発展－」

コメント　和島恭仁雄氏（伊丹市立博物館長）「古文書からみた旧岡田家住宅」

今井美紀氏（柿衛文庫事務局長）「阪神間ﾓﾀﾞﾆｽﾞﾑ文化の成立・崩壊そして再生へ」

芝村篤樹氏（桃山学院大学教授）「大阪市と衛星都市」

今回は、伊丹市を対象に、同市の近世から今日に至る歴史的変遷、さらには都市近郊地域としてのその位置づけが検討されました。具体的な報告の内容では、まず藤井直正氏・川口宏海氏から、近年の伊丹郷町遺跡の調査成果が報告され、なかでも旧岡田家住宅をはじめとする酒造関係の遺構の調査から、18世紀を中心とする同郷町での酒造業の発展（建築規模の大規模化、酒絞り器の増加）や、「水琴窟」の設置や江戸後期から明治にかけての植木や煎茶の風習の流行にみる酒造家を中心とした文化人の出現、明治以降の酒造業の衰退の様子などが紹介されました。

次に、この藤井・川口両報告を受けて、３人の方々からコメントをいただきました。和島恭仁雄氏からは、旧岡田家住宅の所有者の移り変わりと、それに伴う酒造業の盛衰の過程を、今井美紀氏からは、岡田利兵衛・有岡道瑞といった酒造家を中心とした伊丹における文化の発展と、しかしこれが近代における阪神間のモダニズムとは必ずしも結びつかなかった点が、そして芝村篤樹氏からは、人口統計の推移にみる伊丹の都市近郊としての発展の可能性と、鉄道誘致の失敗などにより都市中心軸からはずれたこと、などが指摘されました。質疑応答の中では、フロアーの岡田家の子孫の方から、今日の文化庁の文化財指定の問題点の指摘もありました。

＜第６回＞　尼崎市との共催企画、参加者約400名

日時・場所　1996年10月26日（土）午後１時～５時３０分　アルカイックホール・オクト

講　演　網野善彦氏（神奈川大学特任教授）「地域史研究の現状と課題－長洲御厨（ながすみくりや）等を中心に－」

ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ「今、求められる地域史、自治体史とは」

（ﾊﾟﾈﾗｰ）　　山崎隆三氏、田辺眞人氏、大国正美氏、岩城卓二氏ほか　司会・奥村弘氏

市制80周年を機に新市史編さん事業に着手する尼崎市との共催企画として、「市民とともにつくる新「尼崎市史」」をテーマに開催され、450席のホールがほぼ満席になる大盛況でした。

網野氏の講演では、単一民族国家観や農業社会偏重といった従来の日本史像の見直し、学際的な資料学の成果を基礎にした新たな歴史像提起の必要性が、尼崎の長洲御厨研究の紹介などとからめて指摘されました。パネルディスカッションでは、生活・文化史を重視し、聞き取りやフィールドワークなどを通じた市民参加型の新「尼崎市史」構想が紹介され、時代の変化に応じた新しいスタイルの地域史・自治体史のあり方について、活発な議論が展開されました。出席者の感想文の中には、内容面への厳しい注文もありましたが、全体としては、市民とともに地域に根ざした歴史研究をめざす尼崎市や史料ネットの姿勢が大きな共感を呼んだことがうかがえます。

なお、この第６回の内容は、尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』の特集号で、くわしく紹介される予定です。

震災記録 未来に残そう

史料保全運動に取り組む

阪神大震災対策歴史学会連絡会代表幹事

奥村　弘さん

1960年生まれ。大阪市出身。83年神戸大学文学部を卒業、同大学院文化学研究科を中退し、京都大学人文科学研究所助手を経て91年から現職。日本近代史、特に地域社会史を専攻。阪神大震災対策歴史学会連絡会は、大阪歴史学会、日本史研究会、大阪歴史科学協議会と、京都民科歴史部会を加えた4団体を幹事団体にして結成された。

――史料ネットができたいきさつは？

奥村　地震から約2週間後、尼崎の市立地域研究史料館に、関西に拠点を置く三つの学会の関係者が集まりました。「少しでも地域の生活や社会、企業の歴史を伝えるものを残しておかないと」という危機感から全国の主な歴史研究者を網羅する形で、連絡会ができました。その窓口としてできたのが、歴史資料保全網（ネットワーク）です。昨年2月13日でした。

家屋解体に伴う史料の運び出しや、被災地全域の巡回調査が今年3月でようやく区切りがつき、4月からこのネットワークを引き継ぐ組織として作ったのが、同じ略称の「歴史資料ネットワーク」です。

――救出した史料は1500箱になるとか。

奥村　レスキューと私たちが呼んでいる史料救出は、尼崎市から明石市までに及び、1500箱は、民具など大型の歴史資料を除いた数字です。関係自治体や神戸大文学部に保管されています。

近世、近代の文書や書籍、写真、原稿、日誌が中心で、「尼崎公害患者・家族の会」の事務所から搬出した運動の記録など日本の公害関係資料としても貴重なものもあります。

しかし、市史の編さんにあたって作られた古文書のリストをもとに調べた結果では震災前に1割前後が失われ、震災後の巡回調査までにさらに4割前後が失われたとの推定もあります。神戸市のように十分なリストを作っていない市もありました。

――調査の過程では、研究者と市民のギャップもあったと聞きます。

奥村　歴史資料とは何か、ということが説明しないと分かってもらえない、という面はありました。市民が日常生活で持っている写真やビラなどについて「そんなものが役に立つんですか」とか「市役所にあるやろ」という反応ですね。世代によっても意識の違いはありましたね。ただ、震災の記録を未来に向かって残したい、という市民レベルの動きが広範にあったこと、これは強調しておきたいですね。神戸大の震災文庫にも大分集まっています。

――市民講座にも新しい取り組みがあるそうですね。

奥村　埋蔵文化財では、発掘の節目に現地説明会が必ずといってよいほど開かれています。文献などではそれがなさ過ぎたな、という反省から、神戸市から始めて、芦屋、西宮、宝塚、伊丹と「歴史と文化を考える市民講座」を続けています。10月には尼崎で、そのあと大阪・西淀川区や川西などでも、と思っています。

西宮の講座以降は、被災史料の展示もあわせて行っています。

西宮の門戸厄神では歴史資料の展示に1200人が訪れ、宝塚では、市史資料室と共催した「古文書を読む会」に予想をはるかに超える120人が詰めかけ、市民の自主的運営に切り替わったほどです。

年配の人ばかりでなく、新住民も多いのが特徴です。現代都市は、代々住み続ける人たちだけで構成されていた昔とは違い新旧住民が混在しているわけですが、「過去にあったもの、歴史資料を通じて、もう一度住み続ける意味を探りたい」という思いは新しい住民にも強いのだと思います。

――定住志向が強まれば、もっとそういったことになるでしょうね。さて今後の課題はどんなところに？

奥村　史料保全運動は継続しなければなりません。「秋に家を解体するから来て欲しい」という人がいます。次に埋蔵文化財、石造文化財の問題です。記録も取らずに埋め戻し、壊れていっています。そして「震災に関する史料の保全」です。このままでは10年後の研究に耐える史料がなくなってしまう恐れがあります。

あっとマンスリー

阪神支局長　山崎　一夫

■全史料協からの協力

文化庁の文化財レスキュー事業にも加わった全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（事務局・埼玉県立文書館）からは、史料ネットの活動に対して昨年来協力を得ています。今年度、歴史資料保全情報ネットワークから歴史資料ネットワークへと改組し、新たな活動を継続していくにあたって、７月26日付けで同協議会会長および近畿部会会長宛に再度協力依頼を行ないました。これを受けて、同協議会および近畿部会からは、会員への史料ネットNews Letter の配布、ネットからの依頼文の会報への掲載、全国大会での記録集等の販売などの協力をいただいています。

同協議会では、今年度災害対策委員会を設けて、震災の経験も踏まえた文書館施設の防災対策の検討を行なっています。また近畿部会では、独自に震災対応の取り組みの記録集を編さんする予定とのことです。一方、文化庁による科学研究「美術工芸品等の防災に関する調査研究」においても、同研究の研究分担者である奥村弘氏を中心に、文書等収蔵施設の震災被害実態調査が進められており、年内にはまとめられる予定です。これらの関連する取り組みの成果を、今後相互に交換しながら活用していくことが望まれます。

■大阪歴科協『歴史科学』特集号

大阪歴史科学協議会は、史料ネットの活動をとりあげた『歴史科学』No.146をこの９月に発行しました。次の２稿が掲載されています。

☆ 大国正美「被災史料の救出と戦後史料保存運動の再検討－歴史資料保全情報ネットワークの活動を通して－」

☆ 寺田匡宏「被災地の歴史意識と震災体験」

頒価600円。購入申込みは、〒564　吹田市山手町3-3-35関西大学文学部内　藪田貫氏気付　大阪歴科協事務局まで。振込用紙を同封して郵送します（送料実費必要）。

■第２回「被災地の遺跡を考える見学会」の開催

２頁にも紹介している「被災地の遺跡を考える見学会」の第２回は、次の日程で開催される予定です。奮ってご参加ください。

集　合　　1996年12月19日（木）午後３時、ＪＲ明石駅前集合

見学先　　明石武家屋敷跡（明石市沖ノ町、城下の武家屋敷跡です）

問い合わせは、史料ネット、または井上勝博（TEL078-871-3767）まで

（日程変更の場合あり、かならず問い合わせたうえでご参加ください）

■史料ネットシンポジウム記録集販売のご案内

「歴史と文化をいかす街づくりシンポジウム」第１回（1995年５月６日、於尼崎市ｱﾙｶｲｯｸﾎｰﾙ・ｵｸﾄ）および第２回（1996年１月28日、於神戸市立博物館）の記録集を販売しています。報告・コメントのみならず、会場からの意見や感想なども掲載。Ｂ５判61頁と54頁。ご入用の方は、ハガキかファックスで下記日本史研究会まで。記録集と振替用紙をお送りします。定価500円、送料実費必要。

〒６０２　京都市上京区新町丸太町上る春帯町３５０　機関誌会館３階
日本史研究会　　TEL.075-256-9211　FAX.075-256-9212

■史料ネットニュースレター郵送購読のご案内

このニュースレターの郵送購読の申込みを受け付けています。1996年度中のニュースレター（第８号まで発行予定）郵送をご希望の方は、本ニュース１頁下欄の募金用の郵便振替口座に500円をお振り込み下さい。その場合、活動支援募金と区別するため、通信欄にかならず「ニュースレター郵送購読希望」と明記してください。

史料ネット NEWS LETTER No. 6　　1996.11.12（火）
編集・発行　歴史資料ネットワーク　〒657　神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学文学部内　TEL.078-881-1212(4070)　FAX.803-0486